

中部の

# エネルギーを 築いた



東邦電力の技術を支え、

松永四天皇に数えられた 宮川 竹馬

宮川竹馬は、東邦電力の技術部門を支え、専務取締役まで栄進した後、日本発送電筆頭理事、四国電力社長を務めた電力人である。宮川は、明治20年1月、高知県幡多郡入野村に、宮川円次郎の次男として生まれた。明治33年4月、県立第二中学中村分校に入り、同39年東京高等工業学校電気科へと進んだ。授業中ほとんどノートを取らないにもか



東京高等工業学校校舎

かわらず、試験の成績はよく、周りから不思議がられた。肋膜炎を患い、

1年遅れて明治43年6月に卒業、三宅順祐教授の推薦で、博多電灯(社長山口恒太郎、明治29年創設)に入社した。



宮川竹馬  
(河野幸之助『現代人物史伝  
宮川竹馬』昭和34年8月)

## 博多電灯・福博電気軌道・九州電灯鉄道

入社した宮川は、外線係兼試験係主任に配属された。現場を歩いて、電柱1本1本の状況を記憶し現場員を驚かせた。同社は、明治44年、福沢桃介が社長、松永安左工門が常務を務める福博電気軌道と合併して博多電灯軌道となり、さらに明治45年佐賀に本社を置く九州電気と合併し、九州電灯鉄道となった。伊丹弥太郎が社長、松永安左工門、田中徳次郎、山口恒太郎が常務取締役であった。

宮川は、外線係長兼試験係長、大正2年さらに住吉火力発電所長を兼務した。住吉火力は明治41年9月竣工(500kW)の新鋭火力で、その後3500kWまで増設していた。宮川は所長となって、石炭受入方法の改善、倉庫整理の断行、職場規律の改革など発電所の改革を進めた。大正2年10月、視察に訪れた田

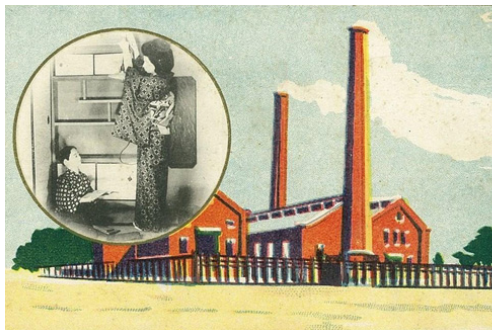


松永安左工門  
(『中京名鑑』昭和3年11月、  
『九電鉄二十六年史』大正12年12月)

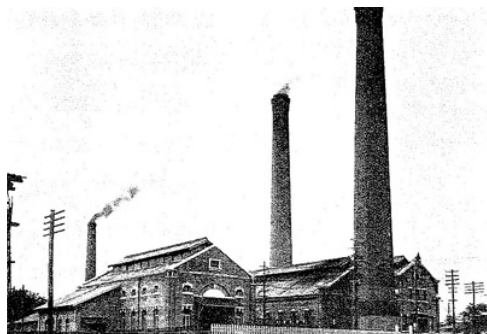


田中徳次郎  
(『中京名鑑』昭和3年11月、  
『九電鉄二十六年史』大正12年12月)

中常務は、宮川の仕事ぶりに感心し、以降何かにつけ宮川を引き立てた。大正6年に電気課長となり、大正10年には電気、土木、建築、機械の4課を統合した技術課長に就任した。当時の部下には、後に関西配電社長となる市川春吉、九州配電副社長となる西山信一、中部配電副社長となる鈴木鹿象らの俊英がいた。



住吉火力発電所(伊藤勲『電力絵葉書館』)



住吉火力発電所(『九州地方電気事業史』平成19年)

## 東邦電力の技術部次長、査業部長、専務取締役

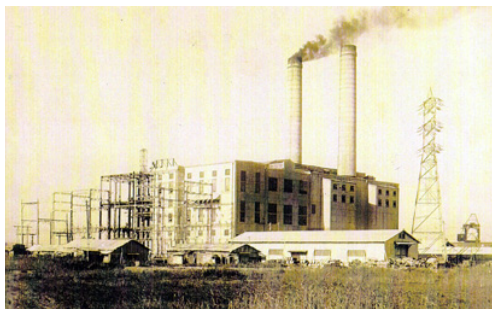
大正11年1月、九州電灯鉄道は、関西電気(名古屋電灯後身、社長福沢桃介)と合併、翌11年6月に東邦電力へと改称した。福沢桃介は名古屋市会と対立して辞任し、経営を朋友松永安左エ門に委ねたのであった。東邦電力は、九州電灯鉄道主体の会社となり、社長に伊丹弥太郎、副社長に松永安左エ門、専務に田中徳次郎が就き、宮川は理事技術部次長として東邦電力の技術を取り仕切った。

合併当初は停電が頻発し市民の不満が高

まっていたので、技術部次長としてその解消に取り組み、配電電圧2200Vを3500Vへと昇圧し、供給の安定をはかった。また、火力の充実を進言し、大正13年4月には名古屋火力建設所長を兼務した。当時、火力は水力の補給用とされていたが、宮川はピーク時への対応にも火力発電を使う「水火併用」を主張した。宮川は、強く反対した大同電力幹部のもとにも足を運び、ピーク時対応としての火力の意義を説明し解を取り付けた。この提案に基づき、当時としては画期的な名古屋火力(3万5000kW)が大正14年11月に完成した。

東邦電力は、関連会社東京電力を設立(大正15年5月)し、東京進出を目指した。宮川は15年8月、臨時東京建設部長として電力供給網の整備を進めた。東京市内の地中線工事(1万V)が東京電灯の妨害で進まなかったとき、宮川は対抗手段を講じてこの妨害を封じた。

昭和2年から営業・調査・技術を統括する



名古屋火力発電所



名古屋火力発電所 竣工式



越戸発電所(当時)(『中京名鑑』昭和11年9月)



越戸発電所 (現況) 筆者撮影

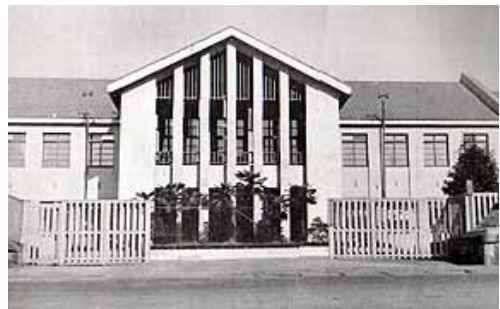
戦略部門であった査業部長に就任した。当時の課題は岡崎電灯との連繋問題であった。宮

川は傍系会社、三河水力電気が建設する越戸発電所の電力を、岡崎電灯に供給する需給契約をまとめ (昭和4年4月、4600kW)、さらに連繋の障害となっていた岡崎電灯の周波数60Hz化に合意した。また東邦電力の豊橋区域を割譲し岡崎電灯に合併させて新しく中部電力を創設する電力統制方策を推進した。折衝は昭和4年1月から2月にかけて集中的に行われた。宮川は東邦側を代表してその取り纏めにあたり、2月20日合併契約を調印、3月12日の株主総会で決議をみた。

## 日本発送電理事、四国電力社長

宮川は昭和4年常務取締役、同12年専務取締役へと栄進したが、同14年に電力国家管理体制が発足すると、請われて日本発送電へと移り、営業部門を担当する筆頭理事となった。しかし、国家管理の仕組みに疑問を抱くようになり、昭和18年には軍・官統制批判の演説を行い、また電力の商工省移管を主張したことで、同年10月辞任を余儀なくした。

戦後は、電力再編成に際し、松永安左エ門に招かれて再編成案の作成に参画した。昭和26年5月に9電力会社が発足すると、四国電力社長となった。就任の背景には、郷里



日本発送電本社

(『日本発送電株式会社記念写真帳』昭和28年)

高知県出身の首相吉田茂の強い推薦があったという。宮川は社長として、電産争議の

解決、県営電気事業復元問題や奈半利川水利権帰属問題の処理等を進めた。昭和30年には藍綬褒章を授与され、39年8月、77歳で逝去した。また、東邦電力の長老として、『東邦電力史』(昭和37年刊行)の編纂委員長も勤めた。郷里入野村海岸には、防潮林植樹をはじめ、郷里への貢献を称え、「宮川竹馬翁頌徳碑」(吉田茂揮毫)が昭和34年に建てられている。

(浅野 伸一)



宮川竹馬翁頌徳碑  
(宮川竹馬『人生つれづれ抄』  
昭和34年6月)

電産争議の解決、県営電気事業復元問題や奈半利川水利権帰属問題の処理等を進めた。昭和30年には藍綬褒章を授与され、39年8月、77歳で逝去した。また、東邦電力の長老として、『東邦電力史』(昭和37年刊行)の編纂委員長も勤めた。郷里入野村海岸には、防潮林植樹をはじめ、郷里への貢献を称え、「宮川竹馬翁頌徳碑」(吉田茂揮毫)が昭和34年に建てられている。

宮川竹馬 (国家的見地より見たる  
水力火力併用問題『電気公論』  
昭和2年11月)